新潟の水辺だより

Vol.39

●編集発行・新潟の水辺を考える会　●発行日・1996年10月18日 Vol.39

TOPICS

ラムサール＆通船川シンポにむけて

すっかり秋の香りがただようようになり、水辺だよりで毎回インフォメーションをしているラムサールシンポジウム新潟まで、残すところあと2ヶ月となりました。今号では、ラムサールシンポの詳細を書きなさいということで、水辺の会の会員の皆様にもぜひ参加していただきたいし、ちょっとご説明したいと思います。

「ラムサールシンポジウム新潟－人と湿地と生きものたち－」は11月28日～30日の3日間開催され、基本となる形はワークショップです（このワークショップは参加型分科会です）。このワークショップは「湿地」「人」「生きものたち」「佐渡」という4つのセッション（分科会）で構成され、「佐渡」以外は全国からの発表希望者もしくは事務局サイドからの要請者により構成され、様々な視点から発表が行われます。「佐渡」セッションに関しては、新潟地域実行委員会事務局のお願いした方を中心に、参加者のエクスカーションの感想なども交えながら構成します。これらの分科会の参加者は、全国のNGOの人達、自治体職員、湿地関係研究者や活動家などが多いと思います。

29日の夜にはチラシ（水色）のように、公開シンポジウムを行います。例えば、今まで佐渡にあまり縁が無かった人でも、今回のシンポジウムで佐渡がラムサール条約に登録されたいうことを考えてみる機会になってほしいと思っています。佐渡を考えるということは、佐渡だけではなくて蒲原平野全体、ひいては渡り鳥のルートとしての地球を考えることであり、またわたしたちと自然とのつきあい方、大熊先生が言っておられる自然への作法を考えることにつながります。

全国には、干潟などの湿地の開発問題をめぐり、反対運動をおこしているNGOがたくさんあり、彼等は本当に真剣にラムサール条約に登録したいと願っています。しかし、現地の自治体がOKを出さない限り登録地にはなれません。そのような状況の中で、新潟の佐渡は登録地になったわけですが、市民への浸透という点ではいささかまだ弱いという感を拭えません。この登録をどうやってこれからの私たちが生かしていくかに、新潟としての真摯な姿勢がかかっているのだと思います。当日は、C.W.ニコルさんのお話しと、市民有志によるロールプレイゲームを行い、少しでも参加した人の何かのきっかけになればと願っています。

また10月27日には、チラシ（ｱｲﾎﾞﾘｰ）のように、内野でプレシンポジウムを行います。やはり佐渡とつきあっていく上で一番大切なのは、地元の理解と協力です。しかし、ラムサール条約といっても実際どんなものなのか、なかなかわかりませんよね。また私たちが佐渡や赤塚について、やっぱりどんなものなのか知らないことはたくさんありますので、その辺の話を中心にやる予定です。会終了後には、みんなで佐渡へ行ってみようと思いますので、通船川シンポの翌日で連チャンになりますが、午後からドライブがてら、どうぞお顔をだして下さい。

それでは、参加できる部分でどうぞ皆さん参加してください。

八木　栄子

「夢を語る」から「私にとっての通船川」へ－昨年に続き通船川シンポジウムを開催

昨年11月18日に開催された通船川シンポジウム「通船川の夢を語る」では、仮装パフォーマンスなどを交え、通船川の再生を機能面は元より、市民にとっての憩の空間の創出や生き物の環境確保などの広い論点を、住民同士、住民と行政、それに専門家がゆっくりと楽しく対話しながら実現してゆこうというメッセージを提起し、反響を得ました。その後、通船川ネットワークと地元住民の連携も徐々に芽生えつつあり、今年6月には、中地区を考える会主催のシンポジウムで研究報告するなど、通船川をテーマとした活動を続けています。

そこで、この一年間に蓄積された議論や情報を総括し、また、通船川をはじめ幾つくかの川の堤防に自費で植樹を続けている方のお話などにいい意味で触発されながら、「夢」から一歩踏み出した議論をと、今年もシンポジウムを開催します。基調講演には「よこはまかわを考える会」の森　清和氏をお迎えする予定です。

昨年は初のロールプレイゲームで大爆笑

たくさんの方々のご参加を期待します。

通船川ルネッサンスシンポジウム96－よみがえれ！ふるさとの川－「私と通船川のかかわり」

日時・平成8年10月26日（土）13:30～16:30
会場・万代市民会館ホール（駐車場はありません）
主催・通船川ネットワーク（通船川ルネッサンス21、新潟の水辺を考える会、中地区を考える会、新潟市東地区公民館）
後援・建設省信濃川下流工事事務所、建設省阿賀野川下流工事事務所、新潟県新潟土木事務所、新潟市、㈶亀田郷地域センター、㈳北陸建設弘済会
（プログラム）
基調講演・森 清和氏（よこはまかわを考える会）
「都市の河川と市民の関わり」
パネルディスカッション
「私と通船川の関わり」
パネリスト・森 清和、横山 通、井上 秀燿、石高清子、鶴間 尚、石月 升、丸山 芳、星島 卓美、村山 稔、梶 瑤子、杉山 泰彦、村山 優子、坪川 和仁、浅井敬一
コメンテーター・大熊 孝
コーディネーター・相楽 治
終了後懇親会があります。

浅井　敬一

Topics&Report トピックス&全国水辺レポート

通船川クリーンアップ作戦
通船川って上流社会？？

11月10日（日）通船川にてクリーンアップ作戦が行われます。

実行委員会では、一般の大人だけではなく、沿川地域の小中学校など、幅広く参加を呼びかけています。

また、9月29日（日）には下見をかねて新潟市東地区公民館の環境講座で通船川ゴミウォッチングを行った。参加者は27名。

まず通船川の最下流部にある山ノ下閘門排水機場で職員の方に説明を頂きました。排水機場の取水口にたまったゴミは毎日手作りの道具を使ってすくい上げているそうです。排水機場にはおよそ2カ月分のゴミがたまっていた。流木、スチロール、ビニール、空き缶、ペットボトル、タイヤなどが多かったほか、家庭で袋にまとめられた状態で拾われた物が意外と目立ちました。その後2グループに分かれ、ボートでウォッチングしながら第2貯木場へ向かいました。待ち時間を利用して排水機場周辺のゴミ拾いも行いました。

第2貯木場近辺で拾われたゴミ

舟からは傷んだ護岸の鋼矢板、水に浮かんだ材木、釣り人、水鳥などの様子が良くわかり、参加者は驚いていました。矢板の穴から生えているアメリカセンダングサのたくましさを改めて感じました。

第2貯木場に着き、周辺のゴミ拾いを行いました。釣り人が多いせいか釣り用品の空き袋などが多く、釣り人のマナーが問われるところです。排水機場の方のご厚意で閘門を通していただき、信濃川との水位差を体験することも出来ました。

通船川クリーンアップ作戦は初めての試みであり、やってみないとわからないところもあり、準備に苦労しています。しかし、これをきっかけに地域の人々から通船川や身近な生活環境に対する関心を高めてもらうことや、ふるさとの川をよみがえらせるに必要な通船川への愛着が高まればと思っています。そして、今後も継続してやって行ければと思っています。詳細はイベント情報をご覧下さい。

星島　卓美

第12回水郷水都全国会議徳島大会に参加して

8月2日から4日まで徳島市で開催された大会に参加してきました。水郷水都全国会議は1984年、滋賀県大津市で開かれた第1回世界湖沼環境会議に参加した国内の住民運動の代表者たちの話し合いから生まれました。翌年に、宍道湖・中海の淡水化反対運動の松江市で第1回全国大会がひらかれ、1992年の第8回大会は当会を事務局として新潟でひらきました。

この大会は名前は硬いですが、事務局はなく、大会時に翌年の開催地を立候補で決めるという形をとっています。そして、全国の団体の発表と交流、親睦の場として、また開催地が全国に対してアピール出来る絶好の機会として、内容から運営まで地元主催者が決めるというユニークなシンポジウムです。

今大会は『川と日本』をテーマに吉野川第十堰改築問題が差し迫った議題としてあげられていました。内容もさることながら、大会の運営はきめ細かく心くばりがされており、スタッフの熱意が感じられ、充実した大会でした。楽しみにしていた交流会も吉野川の河川敷で行われ、賑やかな雰囲気の中で夜空を見ながら、全国の人と酒を酌み交わし、楽しい徳島の夜を過ごしました。

来年は島根県松江市で開催されます。皆様、ぜひご参加ください。

森本　利

大熊孝ファンクラブ発足・・・か？　吉野川河川敷での懇親会

水郷水都全国会議　徳島大会

第2分科会のテーマは「川と山村」－山村の再生と水環境－であった。山間地にダムが築かれその結果山村が滅ぼされるという点を中心に報告、議論があった。

徳島県南部の一級河川那賀川に建設計画がある細川内（ほそごうち）ダム。この建設によって木

頭村（きとうそん）の受ける被害を予測、危惧する発表と藤田村長が全国初の村環境基本条例（村ダム阻止条例）の制定を報告。また周辺の木々の伐採を防ぐべく個人的に木の権利を買収する『立木トラスト』運動も推進中とのこと。

議論は建設省の二人も加わり、山がちの四国に保水機関としてのダムの必要性、環境に配慮した建設内容が示されたのに対し、ダム必要性の不明確さ、相変わらずの環境対策の不十分さが指摘されていた。

木村　和宏

第3分科会　川とくらし

この分科会では、生活と川の関わりから、下水道整備や合併浄化槽の話題がメインになった。

山田國廣氏は基調講演で、広域下水道に関して全国どこも一様に整備を目指しているが、設置の費用、水処理のコスト面から、自治体の負担が非常に大きい。一般的に1～2万人規模の自治体で下水道の整備は200～300億円かかると言われている。その規模の自治体の税収は30～40億円／年である。1/3は国庫補助がでるが、のこり2/3はどうするのか。また、処理は1立方mあたり170円位かかるが、利用者からは100円位しか徴収せず、のこり70円は税金でまかなっている。など、下水道のコスト面でのトリックをコメントされていた。

滋賀県の環境生協の藤井旬子氏は、琵琶湖にアオコが発生したのをきっかけに、合併処理浄化槽の普及運動をされている。メーカーの協力を得て納得の行く性能を持った設備を作るのに苦労した。維持管理も環境生協のスタッフが資格を取り行っていると話された。

今後、水処理についてどのような技術を選択するかで、自治体や私たちの将来を左右するといって良いと言われている。田舎は田舎なり、都会は都会なりで柔軟に考えていく必要があると思う。

杉山　泰彦

気になる吉野川第十堰に関する分科会は次号に掲載できればと思う。（編集）

元気が出ました！
水辺の楽校シンポジウム　調布1996

去る8月24日、東京都調布市の文化会館だづくりで、標記のシンポジウムが行われ、全国から403名もの皆さんが集まってくださり、無事終了しました。

『水辺の楽校』とは、児童・生徒のために学校近傍の水辺にワンドを設けたり、護岸を土羽緩傾斜化するなど構造的環境を柔軟に改め、また“川の達人”を応援して子供たちの成長をサポートすることなどを目指した、建設省の平成8年度新規施策です。

私たちの地元調布市でも、校地の両側に湧水が流れる小学校があり、周辺の水田を含めた“水辺の楽校”整備を目指して運動を行っています。昨年、建設省の8年度予算要求案が公表された段階から、この『水辺の楽校』に因むシンポジウムを企画し、地域社会の理解を深めるべく、市民の手で準備を進めてきました。今年1月にはテーマ別に演者の方々を決定、お忙しい方々にも関わらず幸いに全員にご快諾を頂き、準備を進めました。

内容は、本施策の推進者である建設省の佐藤さんの基調報告、第1部では既に楽校と水辺の一体化を実現している先駆的事例の関係者、第2部では水辺と離れていても頑張る教員や市民の方々を、それぞれ講師としてお招きしました。プログラムは以下のとおりです。

・校長先生のお話
1.『子供に夢を！新しい水辺の姿』
佐藤 直良さん（建設省河川環境課）

・第1時間目　頑張る水辺の楽校の先輩たち
2.『川は道草のできる通学路－横浜市舞岡川整備計画からの提言－』
山道 省三さん（多摩川センター）
3.『校庭と川を一体化させた潤徳小学校の取組み』小笠 俊樹さん（日野市水路清流課）
4.『希少生物“ミズガキ”の保護と復活を目指して』
池田　啓さん（文化庁記念物課）

・第2時間目　ここでもできる！　水辺の楽校
5.『はだしで入れる川になれ！！』
八王子市立小宮小6年4組児童と野口直也さん
6.『水族館は川の入口』
調布市立多摩川小水族館委員会児童と
千葉 晋一さん
7.『わらだやしき自然教室の川と水の環境教育』
松尾 洋子さん（環境考房）

Report-3 全国水辺レポート

・全校集会［総合討論］7名のパネラーと会場の皆さん

全体を学校の授業形式になぞらえて進行、最後の懇親会まで“求職の時間”としました。終了後に集める「全体アンケート」の他に、会場とパネラーの相互交流を目指し途中で回収する「全体討論への意見・質問」を分けて設定するなど、新機軸も打ち出しました。このテーマでは全国で初めてのシンポのためか、参加者は札幌から熊本にまでおよび、アンケートの結果からは行政の職員、計画・設計のコンサルタント、掌中学校の教員の方々が多く、市民とほぼ半々の感じでした。特に担任の子供たちが自主発表をする模擬授業の野口先生、マスクとスノーケルや投網まで持参で舞台を駆け回った子供たちと千葉先生の人気は抜群で、水辺の学校の主役が誰であるかを改めて知らされた思いでした。

今回の企画の広報には、新潟の水辺を考える会をはじめ、全国の市民団体の機関誌が数多く記事として掲載してくださいました。全国からの参加者はこのおかげです。また、パネラーの皆様には、全員ボランティアでご尽力を頂きました。ここで改めて感謝を申し上げます。

『水辺の楽校』の施策は今年度後半からいよいよ対象の絞り込みなどが開始されます。魅力ある計画を市民さんかで提案できたところが推薦されるコンペのような実施計画に期待が持てます。
我々市民も今回のように広く情報の交流を行うことで、全国に水辺と学校の一体化を実現していきたいものです。

君塚　芳輝

第7回全国ﾄﾝﾎﾞ・市民ｻﾐｯﾄ〈佐賀大会〉の報告と〈新潟紫雲寺大会〉の予告

去る8月28日、佐賀県佐賀市でトンボ市民サミットが開催されました。

このサミットは1990年に横浜で始まり、これまで埼玉県寄居町、静岡県磐田市などで開かれ、今回は7回目になります。

去年の名古屋大会には新潟市・松浜トンボ愛好会の会員でもある杉山さん、石月さんと佐藤が参加し、活動報告と松浜の池のPRをしてきましたが、今年は石月さんと佐藤が紫雲寺町の役場の方と共に参加しました。

佐賀市は市内に総延長2,000kmにも及ぶ川やクリークが流れる水の都です。かつて水質が悪化して文化都市ならぬ「ブン蚊都市」の汚名を着せられたこともあったそうですが、市では蚊の発生を抑え、この水辺を快適な環境に戻すため、豊かな水辺空間にトンボが飛び交う町「トンボ王国」の建設に積極的にとりくんできました。

ふるさと創生事業で得た1億円を市内の公園のトンボ池の整備にあて、残ったお金でトンボ基金を設立し、トンボ教室の開催やトンボ写真コンクールをつづけてきた結果、今では市の中心部にあるクリークや公園の中の池にもギンヤンマが飛び交うようになりました。また、パネルディスカッションに先がけて行われたスライドによるトンボや淡水魚の名前あてクイズでは、客席の中の子どもたちから次々と正解が出され、そのレベルの高さに参加者もびっくり。パネラーのトンボ研究家も、「私が小学生のとき、こんなにトンボの名前は知らなかった。すえ恐ろしい。」と本音をもらす場面も。

現地観察会でスタッフによる説明を聞く参加者

このトンボサミットが来年は新潟県紫雲寺町で開催されることになりました。年々大がかりになりつつあったトンボサミットも、来年は初心に返り、アットホームな手作りの大会にしようという方針で現在紫雲寺町役場の担当者を中心に準備が進められています。もちろん「水辺の会」の皆さんには、「物・心・人」三面以上のご支援をお願いすることになると思います。

新潟ではトンボを研究する人は決して多くはありませんが、一説にはトンボの語源は「田んぼ」であるというように米どころ新潟はトンボ王国の素質十分。ぜひ来年のサミットがこれまで身近にいるトンボにあまり気を留めていなかった新潟の人たちにも、ふるさとの自然をまた一つ見直すきっかけとなるような、そんな大会になることを願っています。

新潟市・松浜トンボ愛好会　佐藤　祥子

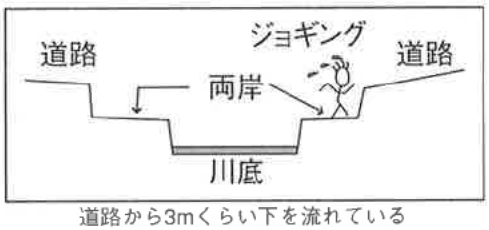
都市河川シリーズ・県内水辺レポート Report 4

都市河川シリーズ　神戸
阪神大震災復旧と住吉川

大阪湾に面し六甲山地との狭い傾斜地にある神戸市に信濃川のような大河は勿論、豊かな水量をたたえた川は無く、小川やせせらぎがあるだけです。市街地を10以上のそのような『浅瀬川』が通過していますが、どれも両岸をコンクリートで固められ川底に石も敷かれて矯（た）められているようです。

地震で護岸壁などにどれ程の被害が出たのかわかりませんが、修復工事の真最中の川もあります。近所のみなと川と呼ばれる浅い流れも崩れた堤防を再建中です。この川は地震直後には土のうで塞き止められて水は消火作業に使われ、その後は避難所の水洗トイレの水にも利用されました。

工事中の住吉川



道路から3mくらい下を流れている

これらの浅瀬川の中でも人々に親しまれている一つが東灘区にある住吉川でしょう（写真）。やはり地震で両岸のジョギングコースが壊れ、現在、切り出した石を組んで直しています。川の中央には作業車用なのか土砂が積まれ道になっています。

川幅は10m位、水深は30cmほど。川底には小さな段差が設けてあるので水が流れ落ちながらせせらぐといった感じです。魚は見当たりませんが水はきれいで付近には湧水も出て近くの学校では数年前まで校内で湧水が池を作り、中になんとオオサンショウウオ！が棲んでいたそうです。

しかし、隣に建った巨大ビルのためか水は湧かなくなり、この天然記念物の生物はある日池の外で死んでいたそうです（本当の話）。大規模な護岸の再生に際して自然の良さを生かせたら良いのでしょうが、石による三面囲いが実際の状況です。

木村　和宏

パネルディスカッション「考えよう信濃川と私達の未来」に参加して

去る9月1日（日）新潟ミナミプラザホテルにて、当地の皆様のご支援を得て、信濃川をテーマに2時間のシンポジウムが催された。パネリストは、阿達秀昭氏（新潟日報社）、五十嵐祐司氏（東邦産業）、西本晴男氏（建設省北陸地建）の3名、私はコーディネーターをつとめた。

西本氏は、甲武信岳に源を発し越後平野を潤してきた信濃川流域について、スライドを使ってわかり易く説明された。特に下流域の治水、利水、親水（環境）について具体的な現状や課題を紹介された。洪水について「安全は忘れたところにやってくる」と結ばれた。

阿達氏は、五十嵐川の幼少の豊かな原体験をなつかしく語られ、たった3～40年で三面がコンクリート張りの姿に変化し、新潟地震を契機に新潟市の掘割が消滅したと話された。結びに、川から街を見る視点から水の回廊構想を提案された。

また、五十嵐氏は、市民の立場から、筏下り大会の体験をふまえて、万代橋を中心にふるさとのシンボルゾーンにしたいと夢を語られ、上下流における産業を軸とした地域連携を提案された。

尚、この企画は、千葉工業大学が地域社会に開かれた大学をめざした文化事業の一環で、3年前より各都市で実施してきた。パネルディスカッションに先がけ、「1964年新潟地震についてあらためて考える」の演題で、長橋純男氏（千葉工業大学）の講演が催された。

島　正之（隅田川市民交流実行委員会）

Report-5 県内水辺レポート

こども河川ふれあい塾

8月26日、横田切れ100周年事業の一つとして、こども河川ふれあい塾が大河津分水資料館、大河津分水の河川敷会場で開催された。新潟の水辺の会からは大熊 孝さん（塾長、川の科学塾）、石月 升さん（川の生き物塾）、杉山 泰彦さん（川の遊び塾）が講師を担当したほか、福井 義隆さん、斎藤 明さんがそれぞれ家族連れで参加した。

川の遊びについて親子で情報交換

「こども河川ふれあい塾」に参加して

福井 義隆・福井 美幸

横田切れ100周年事業の一環として「こども河川ふれあい塾」が開催されることを新潟日報で知り、早速小4年の娘の夏休みの良い思い出になるのでは？と考え応募しました。

運良く当選通知をいただき、集合場所の新潟駅南口へ急ぎました。すでに15人程の親子が集合していました。

建設省信濃川下流工事事務所のマイクロバスに乗り、大河津分水河川敷の会場へと向かいました。長岡駅からの参加者も次々に到着です。受け付けをすまし、ゲストの清水 國明さんと近藤 京子さんのアウトドアーを中心とした子育ては、自分たち子供の頃を思い出すようなさわやかなトークでした。トーク終了後、大河津分水資料館所へ移動し、屋上から大河津分水、信濃川本川の説明を受け、大熊先生の「川の科学塾」の講義を受けました。私は、大熊先生の講義を19年ぶりに受け感動しました。しかし、我が娘にはちょっとむつかしい様子でした。

「川の科学塾」終了後、大河津分水河川敷の会場へ再び移動し、「川の遊び塾」で紙パックを利用して、参加者全員で水中を覗く「箱メガネ」を作りました。親子共々楽しそうにハサミやカッターナイフをやり取りしていました。

出来上がった「箱メガネ」でこの日は大河津分水の水生生物を観察することはできませんでしたが、家に帰り娘はお風呂の中で楽しそうに使用していました。最後に修了証書を参加者全員で授与してもらい、大河津分水を後にしました。

非常に楽しい一日を過ごさせてくれた講師の方々と建設省信濃川工事事務所の職員の方々に感謝します。

河川ふれあい塾に参加したこと

笹口小学校４年 斎藤 みゆき

大河津分水の近くの河原で開かれた、河川ふれあい塾に参加しました。

河川ふれあい塾は、「横田切れ」から100年を記念して開かれたものです。

ゲストの清水国明さんの楽しいトークのあと、大河津資料館に行きました。

そこでまず、「大河津分水物語」というアニメを見ました。

映画の内容は、大河津分水路が完成するまでの話でした。映画を見終わってから館長の加藤先生と屋上に上がり、「向かって右側が大河津分水です。」と言われたときびっくりしました。分水の方が本川より幅が広いからです。90年も昔にこんな大きな人工の川を作ったなんてすごいなぁと思いました。

その後、川の生き物塾に参加しましたが、説明ばっかりで、草や魚をとったりするのかと思っていたのでちょっと残念でしたが、きちんと聞きました。

最後は、楽しみにしていた川の遊び塾です。牛乳パックで箱メガネを作りました。「透明の袋をかぶせて、ガムテープではって、牛乳パックの中に水が入らなければOKです。」と杉山先生が言ったけれど私はうまくできませんでした。

ちょっと内容が難しかったけど川の事や川に住む生き物の事、昔、私の住む新潟におこったことが分かってとても良かったと思いました。

斎藤 明（長女の作文より）

新潟県環境賞受賞

環境保全活動への意欲を高め、その活動の普及促進を図ることを目的として、地域に おける模範となる環境保全活動をたたえるために「新潟県環境賞」がこの度設立され 、新潟の水辺を考える会が受賞しました。表彰式は10月26日、新潟ユニゾンプラザにて行われます。

コラム Column

自然へのまなざし(2)

構造物の寿命

自然とつきあう作法の一つとして、前回は空間的観点から、建造物が景色に調和し、それをより美しく引き立てる存在である必要性について書いた。今回は時間軸の観点から、建造物の時間性・耐久性について考えてみたい。なお、時間については、哲学者の内山 節氏が「循環する時間」と「経過する時間」を対比して優れた論考を展開しており、本紙でも連載中の「20世紀のおわりに」(6月19日)で「雄大な時間」を論じている。私は以前から内山氏に私淑しており、私の時間に対する考え方は氏の影響を深く受けていることを付言しておきたい。

さて、建造物の時間性を考える上で分かりやすい事例として、神社を一定の年数で建て替えていく式年遷宮(しきねんせんぐう)を取り上げてみたい。特に、伊勢神宮の式年遷宮は著名であり、東西の同じ広さの敷地に同じ形の社殿を20年ごとに造り替えている。1993年には第61回目の式年遷宮が行われたばかりである。

20年という年数は、掘立柱に萱の屋根という素木造りの神殿の耐久年数を考慮して定められているが、この建て替えによって、建物や装飾品などに関する技術とシステムが、さらには建物に込められた精神性までが世代的に伝承され、永遠性が確保される形態となっている。確かに、強固な石造りによって永遠性を確保しようとした諸外国の神殿造りのあり方とはかなり異なっている。

61回目の式年遷宮が行われたばかりの伊勢神宮(内宮)
=神宮司庁提供

この式年遷宮に対して、建造物を消耗品的に扱っており、日本人の新しもの好きや刹那主義的精神の根本がこれにあるという見方もある。だが、私はこの見方は一面的であると考えている。なぜなら、まず20年ごとの建て替えで出る古材の方は使えるものは全国の神社の改築などに分配されているし、新しい用材の調達には樹木の育つ「雄大な時間」が考慮されているからである。新たな用材は一万本以上必要であり、そのほとんどが樹齢200年から300年の桧でなければならない。さらに樹齢500年以上の桧も数十本必要である。こうした樹木を確保するためには、数百年の時間を見通し、世代を超えて計画的に継承していく必要がある。この用材の調達は当初は伊勢市の南部にある5400ヘクタールにおよぶ神宮宮域林からなされていたが、江戸時代から今日までは主として木曾山に依存してきた。今後は、この宮域林と新たに熊本県や宮崎県に求められた用材林から主として調達されるとのことである。

ところで、われわれが現在造る建造物もせいぜい30年から50年の寿命しかない。旧新潟市役所の建物も30年程度の寿命しかなかったが、その跡地に建てられたNEXT21にしても、40～50年の耐久性が精一杯であるように思われる。また、構造的に100年以上もつといわれているダムにしても、土砂で満杯になったらどうするのか対策がないまま造られているのが普通であり、100年を待たずして機能喪失に陥るダムが多いのも事実である。原子力発電所にしても耐久年数は数十年であり、その放射能に汚染された跡地利用をどのようにするのか、はっきりとした方針のないまま実施されている。現在われわれの造る建造物のほとんどは、いわば刹那的で、現在だけ機能すればよいという考えで造られているといっても過言でない。無論、そこには、式年遷宮のような技術の伝承とか精神性の永遠性が考慮されているわけではなく、ましてや用材確保のような数百年を見通した時間軸が存在するわけでもない。

しかしながら現実的には、景観的に優れた建造物であるならば、消耗品的に造られたものでも、40～50年の寿命を経過すると、それと関係をもった人間にとっては成長の証しが刻み込まれ、第二の自然とも言いうる存在に転化する。例えば、万代橋は、造られた当時は周辺の木造建築と比較して硬質で巨大であるため必ずしも調和していなかったが、今や周辺とも調和が取れ、新潟市民にとって掛け替えのない故郷の象徴となっているのである。仮に、この万代橋を取り壊すということになれば、強い反対運動が発生するにちがいない。

換言すれば、人と関係の深い建造物であれば、時間を経過するとともに精神性が付与され、それを引き継ぎたいという願望が生じてくるのである。ところが現在、建造物を造る際に、景観的な配慮が乏しいのはもとより、時間性や精神性に対する配慮もほとんどないという情況にある。建造物を造るにあたって、耐用年数を含め、どうのような時間を付与しようとしたのか、本来、設計者に問われなければならない作法である。

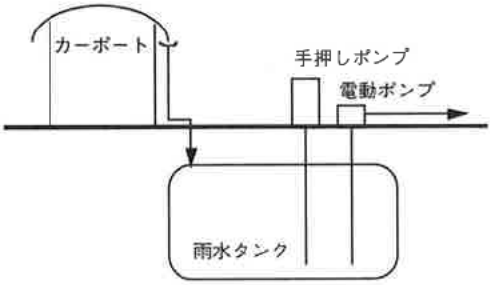
(新潟日報連載記事より)

大熊　孝

Report-6 県内水辺レポート

雨のめぐみ

フランスの陶芸家のベルナール・パリシは「地上の水が蒸発して雲となり、さらにそれが雨となって降り、地下にしみこみ、川に流れ、海にいたる」という水の動きを「水循環」として明らかにしました。ところで市街地の降雨のほとんどは、排水路を流れ河川に排出されるのが普通ではないかと考えられます。私の住む新津市では年間の降水量が1700～1800mm位あり、新津駅周辺の雨水はポンプで新津川や能代川に排出されています。



雨水利用システムの概要

集雨面積	25㎡
雨水タンク容量	2㎥
利用	電動ポンプ→　トイレの洗浄水 手押しポンプ→散水

コンクリートやアスファルトで流出係数が大きくなった市街地における雨水対策を調べていたら、東京都墨田区の雨水利用を知りました。代表的なものは両国国技館で、840㎡の屋根から集められた雨水が1000㎥タンクに貯められトイレや散水に利用されているということです。

手押しポンプで雨水を汲み上げているところ（中央）

自宅のカーポートを新設する機会に雨水利用システムを計画し、土曜や日曜日を利用して塩化ビニル管の配管や手押しポンプを据え付けました。雨水タンクや電動ポンプとトイレまでの配管は業者に依頼して8月に完成しました。雨の恵みはわが家の木々を潤すだけだけでなく、雨水の流出を抑制しトイレの洗浄に役立っています。アニメ「トトロ」にも出てきた手押しポンプで嬉嬉として水と戯れる子供たちに、水の大切さが伝われば良いなと思っています。

今後、降水量と貯水量の関係をトイレ使用の有無や使用量から調査し、さらに雨水の水質も測定出来たらと思っています。利用が始まったばかりでいろいろな問題が出るかもしれませんが、いずれ使用報告をさせていただきます。

雨水利用システムで参考としたおもな図書

1) ソーラシステム研究グループ＋押田勇雄「都市の水循環」NHKブック、1982年
2) 高橋 裕「都市の水」岩波新書34、1988年
3) グループ・レインドロップス「やってみよう雨水利用」北斗出版、1994年

長井　一義　BNN00233@niftyserve.or.jp

高橋　素晴君 太平洋横断バンザイ！

サウサリート市沖合のアドバンテージ号（中央）

7月22日12：00　夢の島マリーナを出発。25日5or6p.m.エンジン修理の為戻り、房総、千倉沖5kmの地点より再スタート。8月14日日付変更線通過。9月13日夜明け前6：00a.m.頃、アメリカ大陸を見る。正午頃、金門橋の下をくぐる。午後2時頃、サウサリート市沖合に錨を降ろす。その後、コーストガードに連絡。午後4時頃、ティブロン市コリシアンヨットクラブに接岸。25日夜の再スタートより51日目。予定通りの入港でした。詳しい航海記は別に書く予定です。

到着翌日、現地での記者会見は、米国のジャーネリストには神秘的、東洋的に響いたようで、質問が相次ぎました。

出発前、大熊先生からいただいた「君の一生にとって短い期間かもしれないが、地球が君と対話する無限の時間でもあるように思われる。航海を終えた時、君

県内水辺レポート Report 7

はきっと哲学者に成長しているのではないかと想像する」とういう励ましのお言葉が想い起こされるひとときでした。

記者会見を受ける素晴君（中央）

「自然に対する謙虚さと自分に対する自信、そして何より“陸の者が信じていれる”ことが加わればいうことなし。（中略）一見ものすごく大変でつらいことでも、本質的な点で“これがよかった、楽しい日々、自然”であるということにうすうす気付いた気がする」
－航海日誌より－

生きる上で大切なものを感覚的につかめ、素晴にとっても、私共にとっても、新しい出逢いの旅だった感じがします。

水辺の会の多くの皆様から、ご支援や安航への熱い祈りをいただき本当にありがとうございました。紙面をかりて深く御礼申し上げます。

高橋　千晴

百十年前の橋造り職人の想いやいかに「万代橋ワークショップ」(1)

残暑のある夏の終わり8月23日の夕方、新潟市の中心部NEXT21ビルのアトリウムで、110年前、明治時代に建造された初代万代橋の坑木をめぐって、その使い道を問う公開の大衆討議が行われた。

今年6月末、万代地下広場工事の現場から、初代萬代橋と二代目万代橋の橋脚の基礎に使用されていた杭が発見された。太さ直径40cm、長さ7～8mの坑木、12本が掘り出された。現在は、鳥屋野潟に沈め保存されているという。「地下広場予定地から出たのだから、広場の展示物に」、「市民の休息する広場のベンチに」という意見が早くからあったという。

公開討議会場は市中心部の公開空地、NEXT21のアトリウム。となったのです。まさか、高さ120mのNEXT21が坑木を逆さにした形だからという訳ではナインでしょうが?!水都のシンボルである歴史的な万代橋に関わる過去の遺物を、未来に向けてどうするかというテーマを、新しい新潟のランドマークシンボルとなっているNEXT21ビルで論じる、ということも何かの巡り合わせか？

当日は市内外から市民や関心のある人約80名が集まり、全員参加で坑木の行方を論じました。NEXT21ビルのアトリウムは公開空間であることと、夕方でもあるためか若い人達かたむろしたり、デートの待合せをしていた人がいて雑然としていた。

はじめに新潟国道工事事務所の三宅所長が挨拶で、万代橋ワークショップの意味を多くの市民にPRすることの効果も含めて多様な意見を聞きたいと大熊教授が川と橋の歴史をひも解き、坑木の現状を奥住工務課長が報告し、年輪環境学では著名な新潟大の鈴木教授が坑木の杉材としての年輪形状や年代から今からさらに約170年前、江戸後期に植えられた人工林の杉（樹齢約60年）であると発表された。

ここでやっと、万代橋ワークショップ（WS）の始まりです。事前に、水辺の会と新潟WS研究会の面々と公開討議の意味とすすめ方を検討しました。坑木だけの話では材木利用の技術論に終始してしまうこと。肝心なのは歴史的な万代橋をまちづくりの中でどのように位置付けしていくかを議論するきっかけとして、坑木があることなどを確認しました。

WSは7グループに分かれ2ラウンド制で行いました。第1ラウンドで万代橋をどう位置づけるか？第2ラウンドで坑木の活用を？とそれぞれテーマとしました。1ラウンド毎に参加者の意見をとりまとめ、各テーブルの進行役が発表しました。中には「割り箸にして市民に配る」「万代橋の上を担いで渡る坑木神輿にする」という翌日の新聞に載った大胆な提案、まじめな意見、提案など200～300個の様々な意見が約2時間に集中しました。全員参加のワークショップの最も効果的な場面です。（林　泰義 新潟WS研究会顧問言）

それぞれの想いを共有するワークショップ

果たして、展示する、ベンチにする等の意見は多かったが、この杭を打った110年前昔の土方職人が生きていたら何というかを大熊会長が代弁してくれた。「数間の長さ、重さの坑木を人力で正確に打ち込むのはものすごく難しく大変だったんだよ!!」と。・・・つづきはVol.40で

世話人　相楽　治

Column-2 生き物代理人シリーズ

水辺雑感
通船川の泥ガメ

新潟の人々は俺たちを泥ガメと呼んでいるようだ。クサガメという正式な名前があるというのに…。泥底の池や水路に住むものだから、そんな名前がつけられたようだが、まあ勝手に好きな名前で呼んでくれ。

一応俺たちの種族の自己紹介をしておこう。体は雌の方が一回り大きく、長さ25cmほどになる。よく見ると甲羅の背面に、3本の稜線があるのが特徴だ。また、首筋には黄色の不規則な線が入る。老熟した雄は全身が真っ黒になることが多く、しばしばイシガメと間違われる。手足の付け根の腺からいい香りを出すが、人間どもには不快に感じるらしい。じつはこの臭いが“クサガメ”の名の元になったらしい。

上の写真は、我が輩が通船川のへりのガツボ（マコモ）の上で気持ちよく昼寝をしているところだ。エッ、「よく好きこのんでそんな汚い所に住んでいるなぁ」だって…。俺たちの住処をさんざん汚しておいて、それはチョットひどい話じゃないか。

通船州の今昔

昔の通船川は、それはきれいだったものさ。コイやフナなどの川魚は豊富で、イトヨやワカサギも海から上ってきた。鋏に毛が生えているカワガニ（モクズガニ）やテナガエビもわんさか住んでいて、俺たちの素敵なご馳走になったもんだ。人間たちも川とともに暮らしていた。通船川から田んぼの細い水路の中までキッツォブネが行き交い、人間の子どもたちはまるで河童みたいに暗くなるまで魚を追っかけてた。ときには俺たちの仲間もヤンドモに捕まってさんざチョされたこともあった。だが、同じ川仲間として一緒に生きているという妙な連帯感があったような気がする。

この川が変わり始めたのはいつの頃からだったろうか。以前から工場廃水で汚れ始めてはいたが、新潟地震の後から急速に住み心地が悪くなったような気がする。両岸は鉄の矢板で固められて陸に登ることもできず、満足に卵を産む場所もなくなった。そして周辺に人家が建ち並ぶようになり、生活雑排水が大量に流れ込むようになった。今じゃご覧の通りのトブ川さぁ。

迫り来る新たな脅威

俺たちクサガメには、もう一つ大きな脅威が迫っている。ミシシッピーアカミミガメという北アメリカからやって来た新参者が増え始めていることだ。こいつらは名前の通り眼の後ろに赤い帯状の斑紋があるのが特徴だ。小さい頃はミドリガメとか呼ばれ、一見かわいらしい顔をしてペットショップで売られているが、大きくなると手に負えなくなり、池や川に放す人がいる。一度野に放されるとやけに生活力が強い。餌を採るのもえげつないほど上手で、ザリガニなんぞはバリバリかみ砕いてしまう。悔しいけれど俺たち田舎者にはとても歯が立たないよ。

下の写真は、横浜の本牧にある三渓園の池の様子だ。水面下の丸太の上でたくさんのカメが甲羅干ししてるが、何と全部がアカミミガメなんだ。今では関東から南の地域は、ほとんどこいつらが支配し、我が同族たちは姿を消しつつある。

新潟県内ではペットブームとともに昭和四十年代初頭から姿を見せ始め、最近では信濃川や阿賀野川下流部の各所で見つかっている。今のところ県内で繁殖している証拠はないが、ほとんどが成熟個体で、その可能性は極めて大きいようだ。

こんな事態になったのは、思慮の足らない人間たちの責任だ。本来その場所に分布しない生き物を野に放すことは、自然の摂理に反する重大な行為なのだ。河川愛護とか環境美化とか、最近様々な名目でいろんな動植物が持ち込まれるケースが増えているが、人間たちから見て「かわいらしいきれいな生き物」だって俺たち土着の生き物には大きな脅威なのだ。ただでさえ環境が悪化して住みにくくなった上、後からやってきた強大な侵入者と日々苦しい闘いを強いられ、たくさんの在来の生き物が人知れず滅び去っていることを忘れないで欲しい。

泥ガメ代理人　井上　信夫

会員紹介 MEMBER'S

因幡　純雄

[redacted]

信濃川水系魚野川流域に生息している41才。私にとって、川は遊ぶより、見る川、眺める川。地域との景観の調和に興味があります。40才以上の人たちの心に、宝物として残っている川の原風景について研究している方はいらっしゃいませんか？。小出町から上流の橋の上や水辺からみる上流の景色は素晴しいところが多い。

櫻井　克信

[redacted]

“信濃川”と、平成5、6年度の2年間、付き合いました。現在は、牛久沼の近くに住み、江戸川、中川、利根川、小貝川を“観察”しながら、通勤しております。

池野　秀嗣

[redacted]

長岡にいる時に入会しました。今は流れ流れて山口にいます。時々「新潟の水辺を考える会」の報せが届くと、あの頃が懐かしくなります。いまでも年に一度信濃川にいって、カヌーを楽しんでいます。
ー新潟県内の好きな水辺ー信濃川は大きな河川ですが、日頃は水量が少なく川幅いっぱいに水が流れている信濃川を見る時は洪水です。しかし、平常時に川幅をいっぱいに水を湛えている信濃川を見ることができる所が有ります。大河津分水路より直上流側がそれです。川の中の中州や岸辺の植生とともにゆったりした水面が日本では少ない「大河」のイメージを満足させてくれるところです。

岩野　一男

[redacted]

主に、環境影響評価の仕事をしています。川及び水辺は、人間のみならず魚類、動物等にとっても重要な自然環境であり、「水辺だより」は十分勉強させてもらっています。
これからは、イベント活動にも参加してみたいと思っています。

前川　仁

[redacted]

昨年の関川、姫川の災害を視察し自然の恐ろしさを痛感しました。治水、利水を考えながら昔ながらの自然にやさしい多自然型の川づくりに参加できればと思っています。
・好きな水辺
1.信濃川　やすらぎ堤
2.阿賀野川（ライン下りの辺りの修景）

竹内　良治

[redacted]

去る4月23日、水質データ隠しの当事者となりました。水道一筋で雨をひたすら恋こがれる半生です。快晴だと憂鬱になるので、太陽光発電に応募しました。現在、習わなかった戦国・江戸、西欧の真実に狂っています。

EVENT & BOOKS

イベント情報

1 角田山植樹ボランティア

日　時●1996年10月27日(日)　午前9時30分
場　所●角田山観音堂
内　容●角田山山頂付近でブナ、ミズナラ、イタヤカエデを計500本植樹／参加費：無料／昼食各自用意／主催：角田山みどりのネットワーク事務局（0256-73-6007）

2 長谷川屋「ジャズライブコンサート」

日　時●1996年10月27日(日)　午後6時30分
集合場所●長谷川屋（巻町鷲ノ木）
内　容●沖山 竜二トリオジャズライブ／参加費3,000円
主催：長谷川屋（0256-72-2858）

3 ミュージカル信濃川～横田切れ100年オリジナル・ミュージカル

日　時●1996年11月3日(日)午後3時30分・11月4日(月)午後3時30分／午後7時
場　所●3日／分水町総合体育館　4日／新潟フェイズ
内　容●新潟県民と劇団ふるさときゃらばん　総勢150人のスペクタルステージ／10月23日申込締切／入場無料／主催：横田切れ100周年事業実行委員会（新潟市土木部土木管理課）（025-228-1000）

4 「森林へ行こう」第3回イベント

日　時●1996年11月4日(月)　午前10時
場　所●三川村字長谷　星野林業炭焼小屋
内　容●植樹会／林業の学習会／参加費：500円／弁当各自持参／主催：にいがた森の仲間の会（0250-24-2211）

5 通船川クリーンアップ作戦

日　時●1996年11月10日(日)　午前9時集合
集合場所●東山ノ下小学校・ジャスコ東新潟店裏薬師橋
内　容●グループに分かれて、通船川とその近辺のゴミ拾いをします。／参加費：無料／軍手持参のこと／主催：通船川クリーンアップ作戦実行委員会（025-241-4119）

書籍情報

1 樋渡直竹写真集　甲突川から消えた鹿児島五大石橋　石橋幻影

出版社●文化ジャーナル鹿児島社
内　容●150年前、肥後の名石工・岩永三五郎らによって架けられた鹿児島甲突川五大石橋。その解体は様々な議論を呼んだが、石橋の姿は消えてしまった。樋渡氏は長年石橋を取り続け、ここに鹿児島の街に息づき、人々の暮らしと共にあった石橋の姿を貴重な写真で甦らせる。

編集後記

今回は遠方からもたくさんの記事をいただきました。ありがとうございます。会員の小船井秀一さん、鶴間　尚さんが療養のため入院されています。早く元気になっていただきたいものです。高橋素晴君の太平洋横断も成功したようで、サンフランシスコの沖合いで発見されたというニュースをテレビで見てほっとしました。おめでとうございます。

通船川とラムサールのイベントの準備が2本だてで進んでいますが、アクセクしているうちに、打ち上げやら忘年会のシーズンが近づいてきます。日頃あまり顔を合わせる機会がないという方もどうぞ気軽にご参加ください。

編集鳥（長）代理（電脳）現場の人 杉山　泰彦

8月31日よりインターネットホームページで当会の情報の提供を開始しました。内容は、会の紹介、イベントの情報、新潟の水辺だよりの記事、当会で制作の出版物の案内、全国の水辺をテーマにしたホームページのリンク集などです。インターネットの特徴でもある即時性、双方向性を活かしたコミュニケーションができればと思っています。
URLは　http://www.on.rim.or.jp/~sugiyama/mizube.html

『新潟の水辺を考える会』ご案内

この会は、遊び半分・真面目心半分で活動しています。

ウォッチングには、家族ぐるみで子供達も一緒に参加したりしています。

自分の足で水辺を歩くなりして、自分でも感じたことから、自分の水辺を発見していく、あるいは考えていくことを大切にしています。

今までとは違った視点から、あらためて自分の身の回りに目を向けて見ると、同じものを見ているのに今までとは違うものに見えてきます。新しい発見があります。自分の世界もまた少し広がってきます。この会も色々な分野の人達が集まって、それぞれの世界がもっと広がっていくような出会いの場を提供できる会にしたいと考えています。あなたの参加お待ちしております。

□設立年　1987年10月1日□目的　水辺に関わる自然、歴史、文化、生活、風俗、スポーツ、レクリエーション並びに科学技術を探り、これからの水辺の望ましい姿を考え、地域の生活向上に寄与することを目的とする。　□代表者　会長　大熊　孝（新潟大学工学部教授）　□会員数　個人130名　法人11団体　□活動①水辺シンポジウムの開催②水辺ウォッチング③会報「新潟の水辺だより」の発行④水辺環境整備に関する学習会⑤全国の水辺グループとの交流　□年会費　個人会員2,000円　賛助会員（法人など）10,000円

入会申込書　　年　月　日

フリガナ 氏　名	男・女	年　齢	職　業	
住　所 電話番号	〒 ☎（　）　―		勤務先 住　所	〒 ☎（　）　―

●事務局　〒950-21新潟市大学南1丁目7821-5　(株)グリーンシグマ内 Phone 025-263-2733 Fax 025-263-1134
●編集　〒950 新潟市河渡2-2-8　(株)サザンウインド内 Phone 025-271-7515 Fax 025-271-1884